



Kekkaku

# 結核

▼ 読みたい項目をクリックしてください

Vol. 99 No.1 January-February 2024

- 症例報告 1…… [早期手術が奏効した先天性気管支閉鎖症に合併した肺非結核性抗酸菌症の1例](#)  
■東 盛志他
- 活動報告 7…… [Variable Numbers of Tandem Repeat \(VNTR\) 法による結核菌の分子疫学的解析により判明した簡易宿所における結核外来性再感染事例](#) ■霜村竜匡他
- 総説 13…… [オートファジーとアルドース還元酵素系の抗酸菌感染宿主の防御免疫機能に及ぼす作用](#) ■清水利朗他

第98回学術講演会特別講演

- 総説 19…… [我が国における結核対策の進展と課題](#) ■森 亨

- 会告 結核・抗酸菌症認定医・指導医および抗酸菌症エキスパートの認定

# 早期手術が奏効した先天性気管支閉鎖症に合併した肺非結核性抗酸菌症の1例

<sup>1</sup>東 盛志    <sup>1</sup>八巻 春那    <sup>1</sup>佐藤 希美    <sup>1</sup>久保田夏史  
<sup>1</sup>恵島 将    <sup>1</sup>高山 幸二    <sup>1</sup>花田 仁子    <sup>2</sup>籠橋 千尋  
<sup>1</sup>瀧 玲子

**要旨：**症例は23歳男性。発熱を主訴に受診し、CTで右肺下葉に粘液貯留で拡張した気管支を伴う consolidation を認めた。5年前のCTから右下葉縦隔側に正常気管支と交通のない拡張した気管支ならびに周囲の気腫肺を認めており、先天性気管支閉鎖症に合併した肺膿瘍と考えた。タズバクタム／ピペラシリン、メロペネムなどで加療したが奏効しなかった。気管支鏡を施行し、右B<sup>6</sup>から白色痰流出あり *Mycobacterium avium* が検出され非結核性抗酸菌症と診断した。アジスロマイシン、エタンプトールを開始したが発熱が持続し全身状態が悪化傾向であった。早期に右下葉切除術を施行したところ、その後解熱傾向となり、術後21カ月経過した現在、再燃なく化学療法を継続している。先天性気管支閉鎖症に合併した非結核性抗酸菌症例に対して、化学療法でコントロール不良の場合は、早期から手術を検討する必要があると思われ報告する。

**キーワード：**先天性気管支閉鎖症，非結核性抗酸菌症

# Variable Numbers of Tandem Repeat (VNTR) 法による結核菌の分子疫学的解析により判明した簡易宿所における結核外来性再感染事例

<sup>1</sup>霜村 竜匡    <sup>2</sup>小向 潤    <sup>3</sup>工藤 新三    <sup>4</sup>山本 香織

**要旨：**結核治療歴のある簡易宿所の居住者が肺結核（症例1，日本結核病学会病型分類**b**Ⅲ2，喀痰抗酸菌塗抹±）と診断された。再治療時と初回治療時の検出菌に対し Variable Numbers of Tandem Repeat (VNTR) 法による分子疫学的解析を行ったところ不一致であった。同時期に同一簡易宿所にて発生した肺結核患者（症例2，日本結核病学会病型分類**b**Ⅱ3，喀痰抗酸菌塗抹3+）の検出菌に対し感染源追及目的で実施したVNTR型別では，症例1の再治療時の検出菌と一致を認めたため外来性再感染が発生したと判断した。本事例の外来性再感染発病の成立要因として，①呼吸器症状があり，大量排菌していた患者との接触，②結核蔓延地域内にある簡易宿所での共有スペース利用，③再治療となった患者の糖尿病治療中断に伴う血糖コントロール不良，が示唆された。結核蔓延地域において，結核治療歴のある免疫低下要因を有する者が感染性結核患者との居宅の共有スペースでの接触が疑われる場合，再感染から発病に至る可能性を考慮し，免疫低下を伴う疾患への治療継続の指導，定期的な胸部X線健診および有症状時の早期受診を勧奨することが重要である。

**キーワード：**外来性再感染，再治療，糖尿病，実地疫学，分子疫学，VNTR

# オートファジーとアルドース還元酵素系の抗酸菌感染宿主の防御免疫機能に及ぼす作用

<sup>1</sup>清水 利朗    <sup>2</sup>佐野 千晶    <sup>3</sup>多田納 豊    <sup>4</sup>佐藤 勝昌  
<sup>5</sup>富岡 治明

**要旨**：多剤耐性結核とHIV感染者での難治性結核の増加が結核治療をますます困難なものにしているが、治療期間の短縮と多剤耐性結核への対応に欠かせない新規抗結核薬、特に休眠型の結核菌に有効な薬剤の開発は進んでいない。先に著者らは、代替医療との関連で、生薬と抗菌薬との併用療法の可能性について、結核菌の感染宿主におけるTh17細胞の誘導との関連から生薬による免疫補助療法の可能性について論じたが、著効とは言えないものの、ある程度の薬効が期待できるものと考えられた。この総説では、生薬を用いた難治性結核の免疫補助療法を念頭に置いて、結核患者における防御免疫で、宿主マクロファージのオートファジーと、免疫細胞間の活性化シグナルを亢進し、炎症反応を惹起することが知られるアルドース還元酵素系がどのような役割を演じているのかについて、著者らのこれまでの研究で得られた実験成績と、最近の知見とを踏まえて考察してみたい。

**キーワード**：結核，感染防御機構，オートファジー，シグナル伝達，アルドース還元酵素

第98回学術講演会特別講演

# 我が国における結核対策の進展と課題

森 亭

**要旨**：McKeown<sup>1)</sup>が指摘したように、欧米では化学療法に代表される近代的な結核対策が導入されるより先に結核の流行は最盛期を過ぎていた。しかし、都市化・産業革命を欧米に後れて迎えた日本では、まさにその流行の絶頂期からいくばくもしないうちに化学療法や予防接種、スクリーニング等一連の新技术が導入され、その普及・拡大が進行した。そのなかで結核対策に関して、我が国独自の病理発生等に関する理論に基づいた対策体系が構築され実践されてきた。対策の多くの分野で政府、学会・専門団体、民間団体、地域社会が一致して、1960年代以前「亡国病」と呼ばれたこの病気の克服に努めた。本稿ではこうした日本の結核対策の移り変わりや得失を対策分野別に観察し、検討を加え、近い将来の結核終息に向けての対策のあり方を探る。

**キーワード**：結核対策，疫学転換，病理発生